日本医師会

赤ひげ大賞

地域で献身的な医療活動を行う医師を毎年顕彰する「日本医師会　赤ひげ大賞」（主催・日本医師会、産経新聞社）の第14回の受賞者選考がまもなく始まる。受賞者の志を次代につなごうと、第11回からは現役の医学生のグループを選考委員に加えるなど、新たな取り組みも行われている。主催する日本医師会の松本吉郎会長と、特別協賛する太陽生命保険の田村泰朗社長に、賞の意義や地域医療・社会保障の重要性などについて語ってもらった。

地域医療支える医師の「思い」

日本医師会会長　松本吉郎氏　×　太陽生命保険社長　田村泰朗氏

まつもと・きちろう　浜松医科大卒。昭和63年、松本皮膚科形成外科医院（さいたま市見沼区）を開業。埼玉県医師会常任理事、日本医師会常任理事などを経て、令和4年6月から現職。山口県出身。

たむら・やすろう　東大文学部卒。昭和62年、太陽生命保険入社。四日市支社長、執行役員企画部長、取締役常務執行役員、代表取締役専務執行役員などを経て、今年4月から現職。大阪府出身。

地域医療を支える医師を顕彰する「赤ひげ大賞」の意義について改めてお聞かせください

松本　選考対象となる先生方の功績は皆さん素晴らしく、本来は甲乙つけがたいと思っています。医療資源や人的資源が限られた地域で、ネットワークの形成や情報通信機器の活用など、診療の基盤を構築されたり、医療機関まで来ることができない患者さんの自宅まで昼夜を問わず医療を届けるばかりでなく、町おこしや地域での生きがいづくりといった幅広い活動に従事されている方もおられ、毎回、感銘を受けています。

田村　昨年の秋、私はオブザーバーとして初めて選考会に参加させていただいたのですが、どの先生も素晴らしい活動で、選考が大変なのがよく分かりました。そのとき感じたのが、先生方の活動を支えているのは地域や住民への「思い」だということです。私たちも地域のご家庭を一軒一軒訪問する仕事をしていますが、こういった「思い」や住民に向きあう「姿勢」を大切にしなければならないと改めて思いました。

松本会長就任後の第11回からは、選考会に医学生が加わるようになりました

松本　各都道府県医師会から推薦される候補者は、私たちから見てもスーパーマンのような先生が多いのですが、活動がその方だけで終わるのでなく、いかに継承していくか、広めていくかという視点も必要です。そういった意味から医学生の皆さんにも、選考委員として参加し、受賞の先生方と交流してもらうようにしました。情熱を持った先生方の、医師としての在り方にじかに触れることで、将来の歩みに大きく影響するものと期待しています。それらの医学生の方々と実際に話してみても、地域医療への決意がよく伝わってくるので、やってよかったと思っています。

太陽生命保険は「地域医療に携わる先生方と同じような道を歩ませていただいている」と田村社長は選考会で語られました

田村　職場を訪問し、そこで働いている方々に保険商品を案内し販売する生命保険会社とは違って、太陽生命は地域のご家庭を回って保険を販売し、その声を聞きながら保険商品・サービスを開発してきました。医療と生命保険という点では違いますが、地域住民の方々にしっかり向きあうという点が共通していると思っています。

松本会長は毎年、受賞者と接し、各地の医師会も回っていますが、改めて「理想のかかりつけ医」とは

松本　私は臨床医ですので、やはり少しでも現場に身を置き続けたいとの気持ちから、毎日ではありませんが、朝6時から2時間程度、自院で診療してから日本医師会に向かいます。患者さんは単なる治療や手当てだけでなく、「自分のことをよく分かっている医師に診てもらいたい」という「安心感」を求めているのではないかと思っています。ですから、診療におけるたわいのないような会話も大事にして、患者さんの心も含めて元気に、信頼されるような医師に一歩でも近づけるよう、これからも診療を続けていきたいと考えています。

田村社長は生命保険会社の役割を「社会保障制度の補完」と語っています

田村　国民皆保険をはじめ、日本の社会保障制度は世界に誇るべき素晴らしいものですが、それだけでは生活の不安がすべては応えられないところもあると思います。私が太陽生命に入社した昭和62年には、男女とも平均寿命が今よりも10歳くらい短かったのですが、医療技術の進歩などにより年々、寿命が延びてきました。それはいいことですが、一方で不安な要素も増えてきます。

具体的には？

田村　10年ほど前、高齢化が進む中で「保険商品で何かお役に立てないか」ということでプロジェクトを立ち上げたのですが、ご家庭を一軒一軒回る現場から寄せられた声で最も大きかったのが「認知症」でした。認知症になると初期の介護費用などが結構かかりますが、困っていたり不安を感じていたりする方々が想像以上に多いと知りました。当時、生命保険業界では、健康に不安のある方でも加入できる認知症に関する保険はありませんでしたが、「認知症保険」を開発しました。認知症に関しては社会保障では十分にカバーされていない部分があったこともあり、現在、認知症関連商品の累計販売件数が100万件を超え、生命保険会社として存在意義を果たせたかなと思っています。

社会課題という点では、地域医療にも少子高齢化の影響がありますね

松本　少子化により、産科や小児科には非常に大きな影響が出ています。産科の診療や出産、小児の医療ができなくなることは、その地域での生活ができなくなることに等しい。そういった地域には補助金など、国にしっかり支援していただいて、地域社会が保てるよう提言しています。

医師の地域的偏在などの課題もあります

松本　医師の偏在については一気に解決できる魔法のつえのようなものはないため、効果のあるものを数組み合わせて対応すべきではないかと考えています。例えば、医学部を卒業して医師になったからには、一定期間は保険医療機関で保険医としてある程度勤務していただきたい。また、長期でなくていいので、医師が少ない地域での勤務も組み合わせてもらいたいということを提言しています。さらに、医師が少ない地域で開業したいとか勤務を続けたいという場合には、国に支援していただきたいといったことも起案いし、今、少しずつ予算が付いてきているところです。

今後の取り組みについて教えてください

田村　寿命が延びる中、高齢期の長い人生を支えていこうとすると、家計に占める医療費負担の割合もそれなりに重くなります。けれども、高齢になると「持病があって保険に入れない」というケースがあるのです。太陽生命では、そういう方々にも保険に入っていただけるよう、加入要件を緩和した保険の開発を検討しています。これは一例ですが、今後もお客さまと向き合ってニーズをしっかり聞き取り、必要とされる保険商品やサービスを開発していきたいと思います。

松本　医療サービスの単価は公定の価格、つまり診療報酬によって決められています。世の中は値上げが続いていますが、診療報酬の引き上げ幅は少なく、人件費や光熱費、さまざまな医療資材の高騰などで病院も診療所も苦しい状況が続きます。医療提供が続けられないところも出てきています。必要なときに必要な医療を受けられないことはあってはならないことであり、国民皆保険制度を堅持し、国民の命と健康を守るためにも関係団体とも連携し、国にもお願いして取り組んでいく決意です。

医学生に継承される受賞者の志

住民に向き合う「姿勢」の大切さ

対談する松本吉郎・日本医師会会長（右）と田村泰朗・太陽生命保険社長＝東京都文京区の日本医師会館

日本医師会　赤ひげ大賞

地域に密着して人々の健康を支える医師の功績をたたえ、広く国民に伝えるとともに、次代の日本を支える地域医療の大切さをアピールする事業として日本医師会と産経新聞社が共同で平成24年に創設した。全国の都道府県医師会の推薦を受け、病を診るだけでなく地域に根付き、かかりつけ医として生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努める医師の中から毎年5人を大賞に選んで表彰する。第8回からは功労賞も設け、第11回からは選考委員に医学生のグループも加わって選考が行われている。

江戸時代の小石川養生所を舞台に、「赤ひげ」と呼ばれる所長と青年医師との心の交流を描いた山本周五郎の『赤ひげ診療譚』にあやかって名付けられた。

人生100歳時代。
元気に長生きしながら、自分らしく生きていく。
それは誰もが望む理想の未来。
太陽生命の保険組曲Best MYWAYは、
そんなひとりひとりの生き方を応援していきます。
あなたの人生という道に、もっともっと寄り添えるように。
太陽生命の新たな挑戦の道のりもまた、
ここから始まります。

あなたの人生にベストな安心を。
太陽生命の保険組曲Best に
新シリーズ、登場。

保険組曲 Best MY WAY

元気！長生き！　太陽生命　資料請求は 0120-264-333　資料のご請求は自動音声で24時間受付しております。　太陽生命ダイレクト　さあ、保険の新次元へ。T&D保険グループ